

[原著論文]

中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果: 中国人大学生の自他評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討^{1), 2)}

毛 新 華 (神戸学院大学)
大 坊 郁 夫 (東京未来大学)

The effectiveness of a social skills training program with Chinese cultural characteristics: Examining the cognitive and behavioral changes in Chinese undergraduates using self-assessment and evaluation by others

Xinhua MAO (*Faculty of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University*)
Ikuo DAIBO (*School of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University*)

The cognitive and behavioral effectiveness of a social skills training (SST) program involving uniquely Chinese cultural characteristics was investigated through self- and others' assessment. Chinese undergraduates ($N=39$) were divided into a control group and an SST group. The SST group participated a brief SST program that was developed by incorporating cross-cultural social skills and unique Chinese cultural characteristics. The control group participated in a program that bears no relationship to social skills. In order to examine the behavioral effectiveness of the program, a series of conversational and observational experiments was conducted. The results indicated that Chinese, cross-cultural, and Japanese social skills' scores of the SST group increased significantly after the program compared with the control group. This suggested the effectiveness of the program on participants' cognition. The scales for evaluating participants' behaviors from self-observations and those of other observers also showed significant changes in the SST group. It is concluded that the program was effective for changing participants' behaviors in addition to their cognition. Simultaneous changes in Chinese and Japanese skill factors suggested the possibility that cultural factors are connected to each other.

Key words : social skills training, culture, effectiveness, evaluation, Chinese undergraduates
キーワード : 社会的スキル・トレーニング、文化、効果、評価、中国人大学生

問題と目的

社会心理学領域における社会的スキルの研究は、さまざまな対人コミュニケーション場面を対象としている。そのため、如何にして対人関係を円滑に行うかに関する「総合的な社会的スキル」が重要視されている。そこで、本研究は、社会心理学的観点から出発した菊池(1988)の「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル」という定義に従って、総合的な社会的スキルの議論を行う。

社会的スキルの重要な特徴は二つある。一つは文化的特徴で、もう一つは向上可能性である。文化的特徴について、大坊(2003)は、文化に由来する社会規範が当該の文化における望ましい行動傾向を決めるとも言えるため、文化が社会的スキルの種類を規定すると指摘している。もう一つの向上可能性について、Argyle(1967)は、社会的スキル・トレーニング(Social Skills Training, 以下、SSTと略す)の可能性、すなわち、社会的スキルは練習により向上可能なものであることを主張している。そこで本研究は、この二つの特徴を踏まえ、

- 1) 本研究は、2007年度大阪大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文の一部を加筆・再分析したものである。なお、本研究は日本社会心理学会第48回大会、the 29th International Congress of Psychologyで発表された。
- 2) 本研究の実験の実施には、胡 金生先生(中国・遼寧師範大学)にご協力をいただきました。また、本研究の計画過程および分析において清水裕士先生(関西学院大学)から、改稿において金政祐司先生(追手門学院大学)、木村昌紀先生(神戸女学院大学)、秋山 学先生・吉野絹子先生(神戸学院大学)からご助言をいただきました。また、本文の日本語の校正には、寺口 司さん(大阪大学大学院人間科学研究科)、西浦真喜子さん(関西大学教育推進部)、坪倉美佳さん(神戸学院大学大学院人間文化科学研究科)のご協力をいただきました。諸氏に心より感謝しております。さらに、論文の審査において、主査をはじめ、審査者の先生方から有益なコメントをいただきました。深く感謝いたします。

文化を切り口に SST について検討を行う。

文化と社会的スキル

世界のそれぞれの地域には、風土や歴史的な経緯によって、その地域においてのみ賞賛される行動がある。このような行動は、周りから受け入れられることによって世代間で継承され、その文化固有の対人的な特徴が形成される。文化と社会的スキルの関係を解明しようとした場合、etic-emic（文化共通性-文化独自性）アプローチ（Berry, 1989）が有用である。このアプローチによると、社会的スキルには、どの文化にでも必要とされる通文化的要素（基礎スキル）と、ある特定文化にしか存在しない文化特有の要素（文化スキル）が含まれている。大坊（2006）は「社会的スキルの階層構造」を提案している。記号化や解説といった通文化的要素（基礎スキル）がこの構造の基底にあり、文化特有の要素（文化スキル）を含むさまざまな特定スキルがその上に構築される。文化スキルが基礎的スキルをベースにしているため、両者は互いに完全に独立して存在するとは考えにくい。etic-emic アプローチから作成されている社会的スキル尺度がいくつか存在する。通文化的要素（基礎スキル）尺度の例として、菊池（1988）によって開発された KiSS-18（Kikuchi's Social Skills Scale）や感情的コミュニケーション尺度（Affective of Communication Test（以下、ACT と略す）、Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo, 1980）などがある。

KiSS-18は、アメリカのGoldstein, Sprafkin, Gershaw, & Klein（1980）の「若者のための社会的スキル」の項目リストから和訳され、日本の青年一般の初歩的なスキル（会話を始める）などの測定に用いられている。その後、KiSS-18は、中国や韓国などにおいても適用されている。中国人大学生に適用した際、再テストの信頼性と妥当性（「性差」、「年齢差」、「他の尺度との相関による併存妥当性」）が確認されている（毛・大坊, 2007）。

ACTはアメリカで開発された非言語的な感情の表出性を測定するものであり、大坊（1991）によって日本に適用されている。中国や韓国（上出・大坊・村澤・趙・毛・高橋, 2007）などの国でも適用され、中国人大学生に適用した際の信頼性と妥当性が確認されており（毛・大坊, 2007）、通文化的な適用性があると考えられる。

一方、文化特有の要素（文化的スキル）を明らかにしようとする試みもいくつかある。例えば、アメリカ人同士において重要とされる主張スキルに対して、Takai & Ota（1994）は日本文化にある「腹芸」や「以心伝心」などの特徴に基づき、日本人の社会的スキルを日本的対人コンピテンス尺度（Japanese Interpersonal Communication Competence（以下、JICS と略す））に整理している。この尺度には、間接的メッセージを認知

する「察し能力」、本当の感情を隠し、自己主張を抑える「自己抑制」、目上の人との適切な相互作用ならびに言語使用に関する「上下関係の調整」、感覚的メッセージの操作に関する「対人感受性」、そして、曖昧な態度を必要とする相互作用スキルに関する「あいまいさに対する耐性」という5つの因子がある。

中国文化や中国人同士の間特有な対人的相互作用を理解するためには、Hwang（2006）が提唱しているguanxi-mianziモデルが有効である（園田, 2001）。このモデルは中国における資源所有者と要請者の間のやりとりを例に、資源の要請者が所有者の面子をたてること（mianzi志向）によって、所有者とつながりを持ち（guanxi志向）、所有者から助けをもらう（renqing志向）という対人的なメカニズムを説明するものである。このモデルをベースに、Mao & Daibo（2006）は、中国人大学生社会的スキル尺度（Chinese University-students Social Skills Inventory（以下、ChUSSI と略す））を作成している。この尺度から、中国人大学生にとっての、中国文化に特有な社会的スキルは、相手の面子を重んじる「相手の面子」因子、対人関係において積極的に他者を助ける「友達への奉仕」因子、対人関係においてできる限り自分のネットワークを拡張しようとする「功利主義」因子であることが明らかになっている。人口が多く、自ら必要とする資源を他者とのつながりに頼らないといけない中国において、大学生は、これらのスキルが必要不可欠なものだと考えたのであろう。他方、「社交性」因子は文化共通的な因子として現れている。

以上のような諸研究の成果を踏まえて、本研究では、社会的スキルを、通文化的要素（基礎スキル）と文化特有の要素（文化スキル）の両面から捉える。その際に、KiSS-18とACTは通文化的な基礎スキルを、ChUSSIとJICSのそれぞれは中国文化と日本文化スキルを測定する尺度とする。

SSTの観点、そしてSSTと文化の関係

社会的スキルの向上可能性という特徴に基づき、SSTに関しては、社会的スキルに対する異なる立場から、いくつかの観点が挙げられている。

例えば、社会的スキルを「表現の型」として捉える枠組みでのSSTは、参加者に社会的スキルを身につけさせ、練習を通して上手に実行できるようにさせることを焦点としている。これに対して、社会的スキルの行動論的定義（周囲から受ける強化を維持する可能性を最大にし、罰随伴の可能性を減少させる状況特定の反応；Gresham, 2001）をベースとする「環境に機能する」SSTは、参加者が当該相手（環境）から適切な反応を引き出せる行動ができるようになったかどうか焦点を当てている。後者は、単に社会的スキルを練習し向上

させるだけでなく、社会的スキルの実行によって、相手（環境）とのやりとりが良好になるという機能（結果・効果）の観点まで含めている。行動論的SSTをめぐる実践研究はこれまで、臨床場面において多数存在する。攻撃的な幼児（e.g., 佐藤・佐藤・相川・高山, 1993など）や引っ込み思案な幼児（e.g., 佐藤・佐藤・高山, 1993など）、そしてアスペルガー障害児（e.g., 大月・青山・伊波・清水・中野・宮村・杉山, 2006など）を対象に、SST後の健常児との社会的相互作用に焦点を当て、不適応の子どもを環境に適應するように治療する試みがある。これらの実践的研究はたいへん重要で、対象者への個別SSTにより、「個々人の適應状況や精神的健康状況を向上する」というSSTの目標の実現に欠かせないものである。ただし、実践的研究は個別事例に集中的に焦点化するため、俯瞰的な形で多くの人にとってどのようなスキルがどのような形で有用なのかというアプローチを含めていない。だからこそ、実践的研究が必要であると同時に、一般人（例えば、大学生など）をサンプルとする研究によって実践的研究に還元できるような知見を収集することは重要な意義を持つ。また、実践的研究は一般人をサンプルとする研究にとって、次に何をすべきかの示唆を与えてくれる。つまり、実践的研究と一般人をサンプルとする研究の架け橋を作る必要がある。そこで本研究は、社会心理学の領域から、大学生を対象とするSSTを通して、多くの人にとって有益なスキルが何であるかを考えることを目的とする。

一般人を対象とするSSTは、とりわけ、社会心理学の立場に立ったプログラムが多く開発されている。例えば、アクションリサーチの発想を背景とするラボラトリー・メソッドによる体験学習（Experiential Learning using the Laboratory Method: 以下、ELLM）の方法がある。このトレーニングの参加者は構造化されたプログラムに参加し、そこでの経験を通して、自分の行動に目を向ける。また、他のメンバーからのフィードバックを通して自分自身の行動上の問題を発見・改善することによって、社会的スキルを向上させる（津村・星野, 1996）。中村（2013）は、この方法を用いて、社会的スキルの向上効果を検討している。また、行動と認知の要素を取り入れた社会的スキルの生起モデル（相川, 2009）とELLMを相補的なモデルとして組み合わせたSSTのプログラムも作成されている（津村, 2002）。さらに、参加者の基本的な社会的スキルの再確認を促すことを目的に、人間関係構築に必要な認知的・行動的な要素からなるコミュニケーション分析の方法とELLMの要素を併用したプログラム（大坊・栗林・中野, 2000; 後藤・大坊, 2009）も開発されている。これらの試みでは、参加者の社会的スキルの向上が報告されている。

しかし、上記のいずれの試みも「表現の型」を重視するSSTで、「環境に機能する」ものになっているとはいえない。前節で議論している文化スキルは、特定の文化において表出した行動が相手からポジティブな反応を引き出すことを目的としており、社会的スキルの機能面を重要視している。そこで、文化的要素を従来の「表現の型」のSSTに導入すれば、そのSSTは「環境に機能する」ものに近づけるのではないかと考えられる。

SSTに文化的要素を考慮・導入している研究は、異文化適應の分野に多くみられる。例えば、臨床領域の観点から、Furnham & Bochner（1986）は、在英留学生を対象に、彼らの社会困難を調査した。そして、困難の解決に、英国文化を取り入れたSSTという対応策を提案した。近年、心理教育のプログラムという位置づけで、Tanaka（2012）はAUC-GSモデルを提示した。このモデルでは、認知・行動的な側面から、在日外国人留学生の日本文化適應に、「ソーシャルスキル学習」の可能性を探った。異文化適應の研究に対して、参加者が文化内において文化スキルを習得し、人々と円滑な対人関係の形成に寄与するSSTもある。古くから、個人主義の国として知られている米国では、アサーション・トレーニングの実践が盛んに行われた（田中, 2000）。最近、毛・大坊（2012）は中国で中国人の面子などの要素に注目したSSTを行った。その研究では、異文化適應のSSTと同様に、参加者の認知・行動の側面に注目している。また、大坊ほか（2000）にならい、社会心理学のコミュニケーション分析の観点から、参加者のコミュニケーション実践に重きを置いている。プログラムの構成は、etic-emicアプローチおよび、大坊（2006）の社会的スキルの階層構造の考え方にに基づき、中国文化的スキルを通文化的なスキルの上に位置づけた。参加者の通文化的なスキルのSSTには大坊ほか（2000）のプログラムを踏襲している。他方、中国人とのやりとりを円滑にすることを視野に入れながら、「環境に機能する」ことを目指す中国文化的スキルのプログラムは、前述した「面子」、「友達への奉仕」、「功利主義」などの要素をもとに新たに構成されている。プログラムは、全部で3週間にわたり12セッション実施され、1セッションにつき2時間、セッションとセッションの間に2〜3日の間隔を置いている。中国人大学生を対象にSSTの効果を検証した結果、中国文化の要素と通文化的要素が考慮されているプログラムでは、実験群の中国文化的社会的スキルおよび通文化的社会的スキルのレベルの向上がみられ、日本文化的社会的スキルのレベルに変化はなかった。これらの結果から、プログラムが参加者の持っている文化的要素の変化に影響することが明らかになっている。

そこで、本研究では、「環境に機能する」SSTを意識し、毛・大坊（2012）の文化的なSSTの視点を踏襲し

つつも、後述するこれまでのSSTの問題点を改善し、中国人大学生が中国での日常生活に用いる行動に関する社会的スキルに注目し、改めてSSTの文化的効果を検証することを目的とする。

これまでのSSTの問題点

これまでの社会心理学領域のSST研究には、前述した問題に加え、以下に述べる3つの問題がある。

第1の問題は、SSTの効果を確かめる方法についてである。従来のSSTの研究（大坊ほか，2000；後藤・大坊，2009；毛・大坊，2012；中村，2013；津村，2002）では、自己評価の社会的スキル尺度を用いて、参加者の自らの報告により、SSTの効果を確かめている。自己評価尺度を用いた評価では、回答者の主観的な判断や思い込み、さらに評価の「社会的望ましき」の影響が懸念される。また、渡辺（1996）が指摘するように、自己報告の社会的スキルのレベルと行動レベルとがずれる可能性がある。それにもかかわらず、前記の先行研究では、自己評価尺度の得点が上昇すれば、SSTによって社会的スキルのレベルが向上したと結論づけられている。

これに対して本研究では、SSTの効果を検討するために、参加者の自己評価だけでなく、客観性がより高い他者評価（相川，2009）を導入する。また、参加者の意識面だけでなく、行動面にも焦点を当てた評価を行う。

第2の問題は、SSTの効果を検証する統制群の設定についてである。従来のSST研究（大坊ほか，2000；後藤・大坊，2009；津村，2002）では、ほとんど統制群を設置せず、SSTプログラムの参加者のみの結果を検討している。

ただし、統制群を設置した研究もある。例えば、Adams, Openshaw, Bennion, Mills, & Noble (1988) では、参加者にトレーニングをする旨を伝えてリストにあげておき、実験群が終わるまでトレーニングを引き延ばしておくwait-list統制群を設置している。この統制群にはいかなるトレーニングのプログラムも設定せず、ただ実験群と同じタイミングで社会的スキルの尺度を回答するだけである。相川（1999）では、SSTを通して孤独感を低減させる効果を検証するために、実験群にSSTのプログラムを設定し、統制群にアナグラムなどの社会的スキルと関係のないプログラムを設定している。

本研究では、相川（1999）の研究にならい、実験群にSSTのプログラムを、統制群に社会的スキルと関係のないプログラムを設けて、両群の参加者がファシリテーターと同等に接触するようにし、両群の得点変化を検証する。

第3の問題は、SSTの期間についてである。後藤・大坊（2005）のSSTは、2日間の短期実習スケジュールである。これに対して、3カ月間かけて実施した栗林・

中野（2007）では、向上した社会的スキルの側面が多いことが明らかとなっている。また、津村（2002）は、体験学習のプログラムを中心とした8日間の集中プログラムと、4カ月のセメスタープログラムの効果を比較している。その結果、セメスタープログラムの方が、メンバー相互のフィードバックの質と量が充実しており、そのフィードバックが社会的スキルの向上に影響を与えていることを明らかにしている。

これらの研究から、SSTを行う期間の長短は、SSTの効果に影響を与えると予想され、短い期間のSSTでは効果が明確ではないことが推測される。しかし、コストの観点からは、短期間のSSTの方が実施しやすい。長期間のSSTは、SSTにかかる労力や時間、参加者の負担などの観点から、必ずしも効率的とは言えない。もし短期間のSSTでも一定の効果が期待できるのであれば、短期間SSTの方が低コストで実施できるメリットがある。

そこで、本研究では、毛・大坊（2012）のSSTプログラムを採用するが、同じ目的のプログラムを合体し、セッションの一部を宿題にし、さらにセッションの間隔を詰めるなどして、短縮版のものを作成する。本研究ではこの短縮版のプログラムの効果を確かめる。

本研究の仮説

以上のことを踏まえ、本研究では、「環境に機能する」SSTを意識し、文化的社会的スキルに関する先行研究（毛・大坊，2012）のSSTプログラムの内容に従って、中国人大学生を対象に、実験計画法に則り、統制群に社会的スキルとは無関係のプログラムを設けた。その上で、参加者の社会的スキルの尺度得点と行動指標をSSTの効果指標とし、会話参加者・観察者の視点からSSTの効果を検討する。また、プログラムを短縮し、その効果を先行研究と比較して、短いスケジュールでの実施可能性を模索する。先行研究の結果および本研究で予定される手続きを踏まえ、本研究では以下の作業仮説を立てる。

作業仮説1. 中国人大学生を対象としたSSTのプログラムを受ける実験群の参加者は、社会的スキルに関係しないプログラムを受ける統制群の参加者と比べて、自己意識レベルにおいても、行動レベル（自己評価、観察者評価）においても社会的スキルの向上がみられるであろう。

作業仮説2. 文化共通の内容と中国文化に特有となる内容で構成された本研究のSSTのプログラムでは、実験群の通文化的な社会的スキルと中国文化を反映する社会的スキルの得点は向上し、日本文化を反映する社会的スキルの得点は変化しないであろう。

さらに、短期集中的なSSTプログラムを実施する本研究では、先行研究にある中長期のプログラムと比較して、社会的スキル尺度の意識レベルの得点の向上が限定

的なものかどうかについて検討する。

方 法

方法の概要

本研究の方法は、SSTプログラムの作成、トレーニングの実施、会話実験、観察実験という4つの手続きから構成される。SSTプログラムの作成では、先行研究(毛・大坊, 2012)の中国文化の要素が組み入れられたSSTプログラムの内容に従って、短縮版のSSTプログラムを作成した。その上で、実験群に短縮版のSSTプログラムを、統制群に社会的スキルと無関係のプログラムを実施した。トレーニングの実施の初回と最終回には、参加者に自らの社会的スキル自己評価尺度への回答を求めた。また、トレーニングの前後に、会話実験を行い、参加者を実験協力者と会話させ、会話実験時の行動についての評価を求めた。その際、会話の様子はVTRに撮影された。観察実験は、VTRによる会話映像を刺激として参加者と面識のない大学生に提示し、観察者にトレーニング参加者の行動についての評価を求めた。

実験群と統制群に実施するプログラムの作成

前述したように、毛・大坊(2012)は中国人大学生を対象としたSSTプログラム(以下、「中長期プログラム」と略す)を作成した。本研究では、実験群に短期間で実施できるSSTプログラムを作成するために、この中長期プログラムを短縮した。具体的には、中長期プログラムで検討された、中国人にとってコアとなる文化的スキル(面子、奉仕、対人ネットワーク)の内容をそのまま使用した(etic-emicの文化独自性の部分)。その一方で、基礎スキルの内容(etic-emicの文化共通性の部分)の統合を行い、さらに、体験学習(津村・星野, 1996)のプログラムに必要な要素である「①体験・わかちあい」、「②振り返り(自由記述)」、「③小講義(体験内容と関連のある講義)」のうち、②と③を宿題にする(翌日のプログラムが開始するまでに、振り返りを400字の自由記述にまとめる、小講義の内容がまとめられたプリントを精読する)などの工夫を行った。最終的に、1セッションあたりの時間を1時間、全体で8セッションの短縮プログラムを作成した。中長期プログラムと同様に、導入編、基礎編、文化特性編と展望編の4部構成とした(Table 1)。

導入編は中長期プログラムと同様に、第1セッションと第2セッションによって構成された。参加者の社会的スキルの能力を把握するとともに、参加者に他の参加者との関係開始や人間関係のことを考え直すきっかけを与え、その後のSSTへの関心を喚起した。

基礎編は、第3セッションから第6セッションまでであった。この部分のプログラムは、津村・星野(1996)や大坊ほか(2000)で提示されたプログラムを参考に

して作成した。プログラムでは、参加者が他者とコミュニケーションをとるために必要な言語的(意思伝達)/非言語的スキル(視線・表情)、集団の中で人と関わるスキル(主張・同調)、そして自他共存のための考え方(価値観の共存)や行動(アサーション)など、社会生活における基本的な社会的スキルをトレーニングした。

文化特性編は第7セッションであった。この部分は、中国文化に影響される社会的スキルである「相手の面子」因子、「友達への奉仕」因子、そして「功利主義」因子(Mao & Daibo, 2006)の内容から構成した。これらの因子はHwang(2006)によって提唱され、中国で広く認められた(園田, 2001)中国人同士の間で特有な対人的相互作用の基本要素であるmianzi, renqing, guanxiとそれぞれ対応している。そのため、これらの要素は中国社会で生活するのに重要なもので、その習得度は中国社会における対人関係の円滑さを決めるポイントだと考えられる。本研究では、これらの要素を参加者に身につけさせるために、「a. 面子(mianzi)への理解と相手の面子の維持の仕方」、「b. 周りの人を助ける(renqing)重要性への理解」、「c. 人間関係におけるネットワーク(guanxi)の働きへの理解および構築方法」といった内容をプログラム化した。aについては、まず、中国における「面子」という言葉の意味を参加者一人一人に記述してもらい、それをグループ内で共有することを通して、メンバーに理解させることをねらった。その上で、相手の面子の維持の仕方に関わる2つのロールプレイをメンバー間で互いに実行してもらい、相手の面子の維持方法を身につけることをねらった。2つのロールプレイはそれぞれ、グループ内のメンバーの一人一人に対して、相手の長所を見つけ相手をほめるという「あなたのすてきなところ」と、相手が思っている短所を長所に変えて相手に伝えるという「短所が長所に変身」というプログラムであった。bとcについては、中国という文化背景における「人を助ける」と「多くの人とネットワーク」を持つ行為の重要性や現れ方について参加者に記述してもらい、グループ内でその知見を共有させた。また、参加者はこのような共有を踏まえて、自分がどのように実社会で行動すべきかを考えて、他のメンバーに伝え、方法の良し悪しのフィードバックをしてもらった。さらに、「人を助ける」と「ネットワーク」と「面子」の三者が互いに関連しあっていること(園田, 2001)から、三者の総合的な運用の方法や経験談などについて、参加者間の共有も行った。

上記のプログラムの内容は、いずれも中国文化の社会的スキル内容が課題とされたものであるため、プログラムと因子内容はそれぞれ対応させることが可能であった。これによって、プログラムに基づくSSTを実行すれば、因子内容を構成する中国文化の特徴を反映する行動

毛・大坊：中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果

Table 1 中国文化を配慮した社会的スキル・トレーニングの短縮版のプログラム

順序	レベル	テーマ (モジュール)	解説ポイント	ねらい (期待する向上領域)	コンテンツ
1		<ul style="list-style-type: none"> 初期評定 社会的スキル尺度: ChUS-SI, KiSS-18, ACT, JICS 		初期レベルの把握	自記式質問紙を回答
2	導入編	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 (自己紹介／第一印象) 	<ul style="list-style-type: none"> 話し手、聞き手としてのスキル 	自己表現 (話す、聞かせる)、関係調整、他者理解、対人認知	グループを2つの作業班に分け、お互いに知り合うように班のすべてのメンバーと一対一で自己紹介をする。終了後、班ごとに自己紹介のプロセスでのコミュニケーションの問題点を話し合わせる。
		<ul style="list-style-type: none"> 自分の対人関係の認識 (対人関係地図) 資料 (宿題) 社会的スキルとは人間関係とフィードバック ジョハリの窓 振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係ネットの中で人と関わる／人に関わられる 社会的スキルが含むもの・特性 トレーニング可能性 自己開示・フィードバックの重要性 	<ul style="list-style-type: none"> 自分意識／対人認知 社会的スキル概念の理解・参加意欲／モチベーションの高揚 	<ul style="list-style-type: none"> 自分と周囲にいる人々との間がどのような関係で結びつけられているかを図形化する。その上で、色塗りを通して、関係に対する感情を表現する。 社会的スキルの概念、人間関係の中のフィードバックの重要性、そしてジョハリの窓について資料を閲覧の形で理論から参加者に理解させる。
3		<ul style="list-style-type: none"> 言語／非言語によるコミュニケーション (一方通行／双方通行のコミュニケーション) 	<ul style="list-style-type: none"> 理想的なコミュニケーション形態 	言語／非言語のそれぞれの役割 コミュニケーションの仕方の再認識 チャネルの役割 記号化／解説	ある図形を参加者の1人から他の全員に伝えさせる。一回目ではこの1人が他のメンバーとコミュニケーションができないように伝えてもらう。二回目に対話的な伝え方をさせる。二つの条件で起きたコミュニケーションの違いを話し合いを通して明らかにする。
		<ul style="list-style-type: none"> 視線の役割 (不思議な会話) 表情の表出・解説 (ミラーゲーム) 資料 (宿題) コミュニケーションのプロセスとその阻害要因 振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> 表情の再確認 コミュニケーションにおけるチャネル間の連動性 最も効果的なコミュニケーションのあり方に気づく 	<ul style="list-style-type: none"> 非言語の表出・解説 他者理解 	<ul style="list-style-type: none"> 「不思議な会話」では、2人で一組にし、条件を設けて、相手と会話させる (e.g., 楽しいことを相手を見ないで話す)。 「ミラーゲーム」では、2人一組にし、7つの感情 (悲しみ、怒りなど) を相手に表出し、相手はそれを模倣する、当てるなどをさせる。
4	基礎編	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決 (「ブックマーケット X」に行こう！) 	<ul style="list-style-type: none"> チームワークを作る 組織の中の人間行動 	コミュニケーションの仕方、主張・抑制、リーダーシップ、計画、競争、組織に対する認識	4人1作業班に分け、それぞれ断片的な情報に基づき、口頭で情報を出し合って、作業班で規定時間内に一つの地図を完成させる。また、グループ間で競い合わせる。
		<ul style="list-style-type: none"> 資料 (宿題) チームワーク 組織の中の個人行動 振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> チームの特徴と働く原理の理解 組織と個人行動の関係に関する知識 	<ul style="list-style-type: none"> 価値観の理解、自分の価値観／他者の価値観、相互理解、主張／抑制、説得 	<ul style="list-style-type: none"> 「愛情」、「名誉」、「お金」など10の言葉について、自分にとって価値があると思う順に順位を付ける。そしてそれをグループで発表し、お互いに質問をし合ったり、感想を述べ合ったりする。
5		<ul style="list-style-type: none"> 自分の価値観を再発見する (価値観のランキング) 	<ul style="list-style-type: none"> 価値観は人によって千差万別であることを認識し、互いの違いを認めることの大事さを認識する 		
		<ul style="list-style-type: none"> 資料 (宿題) 価値観と人間関係 振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の価値観を理解することができることにより、初めて他者との人間関係の不一致が理解できる 		
6		<ul style="list-style-type: none"> 適切なアサーションをする (さわやかに断る、不満を主張する) 	<ul style="list-style-type: none"> 相手を尊重し、自分の権利を主張する 	主張、非主張、攻撃的	シナリオで書かれた相手から不当のリエストを受けた場面において、どのように相手に断るかあるいは相手に不満を述べるかについて参加者の間で話し合う。その上で、適切な交渉の仕方をロールプレーを通して身につけてもらう。
		<ul style="list-style-type: none"> 資料 (宿題) なし 振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> 自他権利の双方への尊重のメリット 		

Table 1 続き

順序	レベル	テーマ (モジュール)	解説ポイント	ねらい (期待する向上領域)	コンテンツ
7	文化特性編	<ul style="list-style-type: none"> 相手の面子を考える (短所が長所に変身、あなたの素敵などころは) 中国人の「renqing」と「guanxi」を考える (「renqing」と「guanxi」、さらに、その面子) 	<ul style="list-style-type: none"> 中国人の面子 中国人は助け合うことを通して円滑な人間関係を形成する 中国人の人間関係での面子、「renqing」、「guanxi」の絡み合い 中国人らしい人間関係の特徴 	他者重視の理解、他者尊重の表出、自己抑制、相手への配慮、関係の調整と向上	<p>全員で中国人の面子は何であるかを考え、記述した。「あなたの素敵などころは」では、作業班の他の成員のすてきなところを考え、相手に伝えさせる。「短所が長所に変身」では、本人が思っている自分の短所を作業班の成員がそれを長所に変えていき、本人に伝えさせる。</p> <p>中国という環境の中で「renqing」と「guanxi」のそれぞれの意味合い、表し方、重要性、そして、それに相応しい行動について考え、記述する。さらに、社会活動における「renqing」と「guanxi」と面子の連動性について自分の見解を発表してもらい、自他の意見を総合してもらう。</p>
8	展望編	<ul style="list-style-type: none"> 最終評定 社会的スキル尺度: ChUSSI, KiSS-18, ACT, JICS 将来の対人関係に向けて個人の総合的な振り返りと展望 	<p>総括:</p> <ul style="list-style-type: none"> プログラムを通して、考えたこと これからの人づきあいを考えよう 	最終レベルの把握 実社会に向けるスキルの心の準備 実社会で学んだスキルを運用するための心の準備	<p>自記式質問紙を回答</p> <p>トレーニングプログラムの全体に対する振り返り、そして今後の社会生活における社会的スキルの応用の展望について、記述してもらう。</p>

の向上が期待できるのではないかと考えられる。

第8セッションは展望編であった。ここでは、トレーニング後の参加者の社会的スキルを測定した。また、SSTプログラム全体に対する振り返り、そして今後の社会生活における社会的スキルの応用の展望について記述してもらった。SSTが自分自身の社会的スキルを向上させるきっかけとなることに気づいてもらい、日常生活の中で人と付き合う際のモニタリングの意識を高め、最終的に、自分で自分の人間関係の心得と教訓をまとめる力を付けて、社会的スキルを向上させることを目指した。

統制群では、相川 (1999) と同様、実験群と同じ実験者が、実験群と同じだけの時間を参加者と過ごした。また、プログラムは相川 (1999) のプログラムをアレンジした。例えば、相川 (1999) の「創造性テスト」をそのまま使用し、「アナグラム課題」を中国語の四字熟語に、「埋め込み図形テスト」をIQ訓練問題 (児玉, 2005a, b) に置き換えた。そのほかに、計算問題、「数独」課題、虫食い算問題を加えた。いずれも社会的スキルと無関係のプログラムであった。先行研究のプログラムを踏まえるなどの手続きにより、統制群のトレーニング内容の適切性が確保されたと考える。

トレーニングの実施³⁾

参加者 中国・大連にある遼寧師範大学の心理学関係

3) 本研究のトレーニングプログラムは、参加者にとって、心理的侵襲を伴う内容であるため、実施に当たり、大阪大学大学院人間科学研究科行動学系研究倫理審査会の承認 (承認番号: 18072) を得ている。

の授業で募集した大学生39名 (男性20名、女性19名; 平均年齢21.63±0.66) を対象とした。参加者のトレーニング前の社会的スキルのレベルによる効果の違いを検証できるように⁴⁾、参加者募集では以下のような手続きをとった。39名のうちの19名は、複数の学部の学生469名 (平均年齢21.72±4.06) から選出した。具体的には、「心理学」関係の授業を受講している469名を対象に、ChUSSI尺度を用いたスクリーニングテストを実施した。そして、ChUSSI尺度の得点に基づき、得点の最下位の人から順番に連絡を取り、参加意思のある20名を募った (倫理的観点により、連絡時には、本人に点

4) SSTが「治療」から「予防」に、さらに「教育」に広がった発展の歴史から考えた場合、現代における教育的SSTの対象者は、社会的スキルに問題のある人だけではなく、一般的な人も対象となる。SSTは現在社会的スキルが不足している人だけではなく、将来、社会的スキル不足により生じる人間関係のトラブル予防にも役に立つとされている。(相川, 2009)。そこで、本研究では、教育的SSTの立場をとり、同じプログラムが、スキルが不足している人と、そうでない人のそれぞれにどのような効果をもたらすかを検討した。ただし、このようなサンプルの募集の仕方により、SSTは質の異なる参加者 (スキルフルな人とスキルが不足している人) を同時に対象としている。そのため、同じ点数のスキルの向上には参加者間で異なる意味を孕んでいる可能性があり、議論の余地が残される。しかし、本研究は、あくまで社会的スキルを量的に捉えるつもりで行った。また、参加者の質への配慮として、階層的重回帰分析では、参加者のSST前のスキルの得点を説明変数に投入し、その影響を考慮する仕方を取った。

数が下位であると告げず、ランダムに選ばれたと伝えた。また、20名のうち、1人がトレーニングの途中でキャンセルしたため、最終的に男性10名、女性9名であった。残りの20名（男性10名、女性10名）は選定を行わずに、上記と別の授業にて、自由参加の意思に基づいて募集した。39名の参加者は男女のバランスを考え、ランダムに実験群（20名；男性10名、女性10名）／統制群（19名；男性10名、女性9名）に振り分けた。

実施 第1セッションと第8セッションでは、実験群と統制群のいずれにも、後述の自己評価の社会的スキル尺度を用いて、参加者の社会的スキルのレベルを測定した。第2セッションから第7セッションでは、前述した実験群と統制群に用意したプログラムを実施した。いずれのトレーニングも大学の午後の授業終了後、連続した8日間（1日に1セッション、1セッションあたり1時間）実施した。実施は社会心理学を専攻し、多くのSSTのファシリテーターを経験した中国人男性が行った。実験群へのプログラムのうち、津村・星野（1996）と大坊ほか（2000）のプログラムを参考にして作ったものを実施した際は、それぞれの実施マニュアルに従った。ただし、本研究は短縮バージョンであるため、マニュアルに提示された実施時間を調整した。既存研究になかった文化的スキルのプログラムを実施した際に、プログラム間の統一性を考慮し、体験学習のやり方に近づくように、マニュアルや配付資料を作成し、実施時にはそれらに従った。一方、統制群には、毎セッション、プログラムで用意した6種類の課題から組み合わせて、課題集を作成し、参加者に配付して実施した。初回の実施では、参加者に、これらの課題の実行は会話に関する能力を伸ばすものであると教示した。なお、参加者に同意を得た上で、トレーニングの全過程をデジタルビデオカメラレコーダー（SONY HDR-HC3）を用いて撮影した。参加者はすべてのプログラムに参加し（欠席者は実験群の1名で、欠席回数は1回と少なかったため、この1名に対して補講⁵⁾を行い、分析の対象から除外しなかった）、一律の謝礼が支払われた。

自己報告の社会的スキル尺度 本研究では、通文文化的な基礎スキル尺度（KiSS-18とACT）と文化スキル尺度（中国文化はChUSSI、日本文化はJICS）の2種類を用いた。

(1) **KiSS-18** (菊池, 1988) この尺度は、青年一般

の社会的スキルを測定する尺度である。尺度は18項目で構成され、5件法で回答を求めた。毛・大坊（2007）の中国人大学生を対象とする因子分析の結果を踏まえて、本研究では、1因子構造を用いた。

(2) **感情的コミュニケーション尺度** (ACT; Friedman *et al.*, 1980; 大坊, 1991) この尺度は、非言語的な感情の表出性を測定するものである。尺度は13項目で構成され、9件法で回答を求めた。

(3) **中国人大学生社会的スキル尺度** (ChUSSI; Mao & Daibo, 2006) この尺度は、中国人の行動様式を理論的根拠として開発されたものである。尺度は「相手の面子 (Partner's Mianzi, PM)」、「社交性 (Sociability, SA)」、「友達への奉仕 (Altruistic Behavior, AB)」、「功利主義 (Connection Orientation, CO)」の4つの因子を含み、41項目で構成され、9件法で回答を求めた。

(4) **日本の対人コンピテンス尺度** (JICS; Takai & Ota, 1994) この尺度は、日本人論の中で描かれた日本文化および日本人の行動様式に基づいて開発され、日本式の対人関係の特徴を反映している。尺度は22項目で、「察し能力 (Perceptive Ability, PA)」、「自己抑制 (Self-Restraint, SR)」、「上下関係の調整 (Hierarchical relationship Management, HRM)」、「対人感受性 (Interpersonal Sensitivity, IS)」、「あいまいさに対する耐性 (Tolerance for Ambiguity, TA)」という5つの因子によって構成され、5件法で回答を求めた。以上のChUSSI以外の尺度の翻訳は複数の中国人留学生 (KiSS-18では、在日歴4年以上、日本語学習歴7年以上の5人、ACTとJICSでは、在日歴5年以上の3人) により、とりわけ項目のニュアンスに注目し、極力日本語の原文と同等であるように検討された。そのほか、調査紙には、参加者の性別、年齢を尋ねる変数も含まれていた。

会話実験

実験参加者と実験協力者 トレーニングの参加者は指定された会話相手とともに会話実験に参加した。会話相手は実験協力者であり、参加者と面識のない人物であった。実験協力者は、別の社会的スキルの調査に参加し、ChUSSIの得点が高得点である大学生4名（男女各2名ずつ）であった。実験協力者の実験参加においては、参加者と会話協力者が同じ性別になるように調整した。そして、同じ相手と繰り返し会話する効果（実験はトレーニングの開始前と終了後、計2回）を避けるため、どの時点の会話実験でも参加者は初対面の実験協力者と会話するよう調整した。

質問紙 会話実験において、実験参加者の振る舞いに対し、参加者自身による行動の自己評価を行った。評価尺度の項目は、実験群に実施したプログラムの基礎編・文化編にあるモジュールに基づき、独自に作成した10項目の評価リスト（例えば、話を始めるのがどれほど上

5) 該当者はコミュニケーションのチャンネルに関する第3セッションに欠席した。このセッションの内容は二人で実行可能なものと判断されたため、補講を行った。補講においては、受講者がファシリテーターと一対一で行った以外、内容的・実施時間的に、他の参加者が受けたものと同等的なものであった。この参加者のデータも分析の対象とした。

Table 2 会話実験における行動の自己評価尺度の項目

番号	項目内容
1	あなたは先ほどの人との話を始めるのがどれほど上手だと思いますか？
2	あなたは先ほどの人の話の意図をどれほど理解していますか？
3	あなたは先ほどの人に言おうとする内容をどれほど明確に伝えてありますか？
4	あなたが先ほどの人と話したとき、内容にあった適切な表情はどれほどできていますか？
5	あなたが先ほどの人と話したとき、内容にあった適切なジェスチャーはどれほどできていますか？
6	あなたは先ほどの人と意見をやり取りしたとき、自分の主張と抑制のバランスはどれほどできていますか？
7	あなたは先ほどの人のことをどれほど受け入れていますか？
8	あなたが話をしているとき、どれほど先ほどの人の面子のことを気にしていますか？
9	あなたが話をしているとき、どれほど先の人と良い関係を築こうということを表していますか？
10	全体として、先ほどの人とのコミュニケーションはどれだけ上手にできていますか？

手だったか、どれほど相手の面子を気にしたか、など)であった (Table 2)。各項目に対して、「まったくできていない」から「よくできている」の5件法で回答を求めた。

手続き 実験室の中央に、2脚の椅子を「ハ」の字型になるよう内側向き45度に配置した。2脚の椅子の中心距離は100cmとした。さらに、会話の様子を、250cm離れた位置からデジタルビデオカメラレコーダー (SONY HDR-HC3) で会話者2人の上半身が入るように設置して撮影した⁶⁾。

会話相手である実験協力者が向かって左側の席に着いている状態で、参加者は実験者に誘導され、右側の席に着いた。すべての参加者に「キャンパスライフ」をテーマ⁷⁾に、これから5分間の自由会話をするように求めた (実験協力者は、事前に進んで発言をせずに、ただ参加者の会話相手として振る舞うように教示された)。会話を撮影している際は、録画開始直後に実験者は退出し、実験室は会話者2人きりになるようにした。会話終了後、実験者が再び入室し、参加者が実験室内の両側に設置された机に移るように指示し、前述の行動の評価リストへの回答を求めた (会話終了後、実験協力者による参加者への評価も行われたが、トレーニング前後に登場する実験協力者が異なるため、その評価は分析の対象とし

なかった)。なお、会話実験はトレーニング開始の前日と終了後の翌日、同じ形式で2回にわたり行った。

観察実験

実験参加者 中国・大連にある大連理工大学、大連大学に在学する会話者と面識のない大学生352名 (男性172名、女性175名、不明5名、平均年齢20.98±1.15) が実験に参加した。後述する刺激の性質上、本研究の352名の参加者は全部で8グループ (1グループ32人から58人) から構成された。

刺激 観察者に提示する刺激は会話実験で得られたトレーニングの参加者と会話実験協力者が2人で会話している78本の映像 (39名のトレーニングの前と後) であった。観察者側の負担を考慮し、観察実験では、それぞれの映像の最初の2分間のみを抽出して提示した。刺激抽出法の妥当性は、数十秒から数分間という短い刺激呈示によって観察者が対人コミュニケーションを十分に認知できること (Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe, 1996)、会話の一部 (12分間のうちの9~10分間の1分間) を抽出した観察実験を通して、観察者が会話者に対する全体評価ができること (木村・大坊・余語, 2010)、対人場面を設定した実験場面を時間的に区切っても (15分間の実験場面を5分ごとの3期に)、時間ごとの参加者の社会的スキルのレベルに有意差が認められないこと (相川・佐藤・佐藤・高山, 1993)、などの先行研究の知見から保証される。本研究のプログラムのねらいから、関係開始の上手さなどが評価対象となっており、会話の最初の部分は必要不可欠である。また、田中・相川・小杉 (2002) の抽出の仕方 (10分間の会話の最初の3分間) にならない、会話の最初の部分から抽出した。さらに、78本の刺激映像を10本で1セットのものを7セット、8本で1セットのものを1セット、計8セットに分割した。各セットの映像には、実験群/統制群、男性/女性、トレーニングの開始前/終了後、といったカテゴリーが必ず含まれるようにし、提示順序が

6) 参加者募集の段階で、会話の様子の撮影および第三者への提示、そして、トレーニング場면을撮影することを説明した。参加者がこれらのことについて同意できる場合、同意書に署名した。また、自由参加の趣旨で募った参加者に対して、実験開始までに、「ご自身がしたい時にいつでも実験から脱退することができ、一切不利益を被ることがない」と教示し、参加者の参加・脱退の自由が保証され、倫理的配慮が施された。

7) テーマの選定には、大学生にとって身近で、幅広い内容が話せる話題、初対面でも緊張を和らげることができ、SSTを通して身につけたスキルが発揮しやすい親密な話題であるように配慮した。

ランダムになるように考慮して、編集した⁸⁾。

質問紙 「観察者による会話行動の評価リスト」は前項の会話実験にある「参加者自身による行動の自己評価」の項目内容 (Table 2) をもとに、項目内容における評価対象者の人称を「右側の人 (参加者が常に右側の席に着席しているため)」とし、観察者の会話参加者に対する評価を求めた。各項目に対して、「まったくできていない」から「よくできている」の5件法で回答を求めた。また、参加者の性別と年齢についても尋ねた。

手続き 観察実験はトレーニングが終了した翌週に実施した。また、観察者と会話者との関係性を統制するために、観察実験は会話実験と異なる大学で行った。観察実験では、前述の刺激として作成した8セットの映像群 (1セットにつき、8本か10本の会話映像が含まれている) を参加者となる8つのグループの観察者にそれぞれ1セットずつ提示した。1本の会話刺激の提示が終了するごとに、観察者にトレーニング参加者の会話中の行動について、「観察者による会話行動の評価リスト」を用いて評価してもらった。

結 果

自己報告社会的スキル尺度・行動評価 (自己/観察者) から検討するトレーニングの効果

トレーニングの効果を検討するために、本研究では、参加者の自己報告の社会的スキル尺度、行動評価 (自己/観察者) 尺度における得点の変化を検討した。

分析に先立ち、実験群と統制群のトレーニング開始前の等質性を確認した。まず、実験群と統制群の間に、参加者の自己報告による社会的スキル尺度の得点の違いを確認した。具体的には、群 (実験/統制) の要因と性別要因を独立変数に、年齢および各社会的スキル尺度 (因子) の得点のそれぞれを従属変数とする二要因の分散分析を行ったところ、有意な主効果および交互作用は認められなかった。この結果から、トレーニングを行う前に、実験群と統制群の間、参加者の年齢、自己報告に基づく社会的スキルの程度に違いがないと言えよう。また、本研究では、社会的スキル尺度の得点変化を扱っているため、実験前後の各尺度 (因子) の信頼性を表す

クロンバックの α 係数も確認した。その結果、ChUSSI 尺度全体では.93と.95、ChUSSIの「相手の面子」因子は.84と.91、「社交性」因子は.91と.90、「友達への奉仕」因子は.63と.68、「功利主義」因子は.73と.84であった。KiSS-18では、それぞれ.81と.86であり、ACTでは、それぞれ.72と.77であった。JICSでは、「察し能力」は.61と.76、「自己抑制」は.64と.65、「上下関係の調整」は.66と.69、「対人感受性」は.69と.74、「あいまいさに対する耐性」は.31と.29であった。「あいまいさに対する耐性」因子は信頼性の低さから、以降の分析では省くことにする。これらの結果から、得点の変化は信頼性の低さに由来しないことが保証された。また、トレーニング開始前の会話行動に対する自己評価・観察者の評価における得点において、統制群と実験群に有意差がないこと (順に、 $t(37)=1.43, n.s.$; $t(37)=0.66, n.s.$) も確認された。なお、行動評価の基準となる評価尺度 (10項目) の信頼性係数⁹⁾ が自己・観察者の順に $\alpha=.82$; $\alpha=.93$ と高いため、それぞれの10項目の合計点を評価点とした。さらに、本研究の観察実験においては、映像に現れる一人のトレーニングの参加者に対して複数の観察者 (1グループ分) が評価したため、グループの平均値をトレーニング参加者への観察者評価点とした。この評価点の増加量 (SST後の映像の評価点-SST前の映像の評価点) を従属変数に、グループ (8つ) を独立変数とした1要因の分散分析を行ったところ、グループの主効果が有意ではなかった ($F(7, 31)=0.74, n.s.$)。この結果を踏まえ、本研究では、映像に対する評価には、グループによる差がないとみなして分析を進める。

社会的スキル尺度 (因子) および行動評価尺度の得点の増加量 (トレーニング後 (以下、postと略す) からトレーニング前 (以下、preと略す) の得点を引いて得た差分 (以下、gapと略す)) を基準変数、実験条件 (実験群・統制群) と各尺度 (因子) のpreの得点を説明変数とした階層的重回帰分析を行った。分析においては、参加者のpreの得点がトレーニングの効果に影響すると考えられたため、これを説明変数に加えた。また、分散分析に比べて、階層的重回帰分析は説明変数を連続変数のまま用いることができ、得られた情報を活用する趣旨で、本研究では階層的重回帰分析を採用した。なお、それぞれの尺度 (因子) のpre、postおよびgapの基礎統計量はAppendix 1の通りである。

ステップ1には、実験条件 (統制群=0, 実験群=1)

8) 最も理想的な観察実験の仕方は、すべての映像を同じ観察者に提示することである。しかし、本研究の映像の数による提示時間および回答時間から計算した場合、観察者が最後まで集中して回答することが不可能と判断された。相川ほか (1993) では、複数の映像に対するスキルの評価を、2名1組の評価者2組に分散した。また、田中ほか (2002) でも、一連の映像を複数の評定者に分けて評定させた。これらの研究の方法にならい、本研究では、映像を複数のセットに分けて、それぞれのセットを一つのグループの観察者に約40分間提示して、評価の精度を確保した。

9) 行動の自己評価尺度においては、すべての参加者の評価点が計算のもととなっている。観察実験では、一人の観察者が複数の参加者の映像を見て評価しているため、すべての映像に対する評価点の平均値を一人の観察者の評価点とし、観察実験に参加したすべて観察者の評価点が計算のもととなっている。

Table 3 各尺度の得点変化の差分を基準変数とした階層的重回帰分析の結果

尺度名	予測変数		Step1		Step2		単純傾斜の検定				
			b	β	b	β	b	β	b	β	
ChUSSI	ChUSSI全体 (ChUSSI)	主効果項	gun ^{注1}	9.28	.22	9.37	.22	ChUSSIp _{pre} (-1SD)		ChUSSIp _{pre} (+1SD) ^{注3}	
			ChUSSIp _{pre} ^{注2}	-0.10	-.18	-0.13	-.23	26.11**	.61**	-7.36	-.17
		交互作用項	gun×ChUSSIp _{pre}			-0.44*	-.39*	統制群<実験群			
			R ² /ΔR ²	.08	.08	.22*	.15*				
相手の面子 (PM)		主効果項	gun	5.10	.18	5.28	.19	PMp _{pre} (-1SD)		PMp _{pre} (+1SD)	
			PMp _{pre}	-0.27†	-.29†	-0.31*	-.33*	18.44**	.66**	-7.87	-.28
		交互作用項	gun×PMp _{pre}			-0.86**	-.45**	統制群<実験群			
			R ² /ΔR ²	.09	.09	.30**	.20**				
社交性 (SA)		主効果項	gun	2.22	.15	2.20	.15	SAp _{pre} (-1SD)		SAp _{pre} (+1SD)	
			SAp _{pre}	-0.17*	-.38*	-0.18*	-.40*	6.56*	.43*	-2.16	-.14
		交互作用項	gun×SAp _{pre}			-0.26†	-.28†	統制群<実験群			
			R ² /ΔR ²	.17*	.17*	.25*	.08†				
友達への 奉仕 (AB)		主効果項	gun	0.96	.15	0.96	.15	ABp _{pre} (-1SD)		ABp _{pre} (+1SD)	
			ABp _{pre}	-0.16†	-.31†	-0.17†	-.32†				
		交互作用項	gun×ABp _{pre}			-0.07	-.06				
			R ² /ΔR ²	.12	.12	.12	.00				
功利主義 (CO)		主効果項	gun	1.96*	.37*	1.96*	.37*	COp _{pre} (-1SD)		COp _{pre} (+1SD)	
			COp _{pre}	-0.02	-.05	-0.02	-.05				
		交互作用項	gun×COp _{pre}			0.01	.02				
			R ² /ΔR ²	.14†	.14†	.14	.00				
KiSS-18		主効果項	gun	4.64*	.36*	4.64*	.36*	KiSSp _{pre} (-1SD)		KiSSp _{pre} (+1SD)	
			KiSSp _{pre}	-0.29**	-.41**	-0.30**	-.41**	8.98**	.69**	0.30	.02
		交互作用項	gun×KiSSp _{pre}			-0.48*	-.33*	統制群<実験群			
			R ² /ΔR ²	.27**	.27**	.37**	.11*				
ACT		主効果項	gun	4.28	.21	4.36	.22	ACTp _{pre} (-1SD)		ACTp _{pre} (+1SD)	
			ACTp _{pre}	-0.18	-.25	-0.17	-.23	10.08*	.50*	-1.37	-.07
		交互作用項	gun×ACTp _{pre}			-0.40†	-.28†	統制群<実験群			
			R ² /ΔR ²	.13†	.13†	.20*	.08†				
JICS	察し能力 (PA)	主効果項	gun	0.91	.15	0.95	.16	PAp _{pre} (-1SD)		PAp _{pre} (+1SD)	
			PAp _{pre}	-0.45**	-.50**	-0.42**	-.47**				
		交互作用項	gun×PAp _{pre}			-0.38	-.21				
			R ² /ΔR ²	.30**	.30**	.35**	.04				
自己抑制 (SR)		主効果項	gun	1.15	.19	1.30	.22	SRp _{pre} (-1SD)		SRp _{pre} (+1SD)	
			SRp _{pre}	-0.29*	-.37*	-0.30*	-.39*	3.27*	.55*	-0.67	-.11
		交互作用項	gun×SRp _{pre}			-0.45†	-.29†	統制群<実験群			
			R ² /ΔR ²	.16*	.16*	.25*	.08†				
上下関係の 調整 (HRM)		主効果項	gun	0.64	.22	0.64	.22	HRMp _{pre} (-1SD)		HRMp _{pre} (+1SD)	
			HRMp _{pre}	-0.32**	-.43**	-0.28*	-.37*				
		交互作用項	gun×HRMp _{pre}			-0.21	-.14				
			R ² /ΔR ²	.23**	.23**	.25*	.02				
対人感受性 (IS)		主効果項	gun	0.72	.18	0.68	.17	ISp _{pre} (-1SD)		ISp _{pre} (+1SD)	
			ISp _{pre}	-0.42**	-.59**	-0.30**	-.42**	2.14**	.54**	-0.79	-.20
		交互作用項	gun×ISp _{pre}			-0.52*	-.36*	統制群<実験群			
			R ² /ΔR ²	.37**	.37**	.48**	.10*				

Table 3 続き

尺度名	予測変数	Step1		Step2		単純傾斜の検定				
		b	β	b	β	b	β	b	β	
行動評価 自己評価 (SELF)	主効果項	gun	3.44*	.35*	3.54**	.36**	SELFpre (-1SD)		SELFpre (+1SD)	
		SELFpre	-0.48**	-.48**	-0.44**	-.44**				
	交互作用項	gun×SELFpre			-0.33	-.16				
		$R^2/\Delta R^2$.43**	.43**	.45**	.02				
観察者評価 (OBSERVER)	主効果項	gun	2.24*	.27*	2.18†	.26†	OBSERVERpre (-1SD)		OBSERVERpre (+1SD)	
		OBSERVERpre	-0.47**	-.50**	-0.50**	-.54**				
	交互作用項	gun× OBSERVERpre			-0.19	-.10				
		$R^2/\Delta R^2$.39**	.39*	.40*	.01				

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$.

注1 gunは実験条件(統制群=0, 実験群=1)を示す。

注2 因子名の英文略+preは該当尺度(因子)のトレーニング前の得点項を示す。

注3 (-1SD)と(+1SD)はそれぞれの尺度(因子)におけるトレーニング前得点の低群と高群を示す

とそれぞれの尺度のpreの得点(中心化処理を施された)を投入した。ステップ2には、実験条件×各尺度のpreの得点の交互作用項を投入した。それぞれの分析における説明変数と基準変数の平均値、標準偏差および相関係数はAppendix 2の通りである。階層的重回帰の分析の結果はTable 3の通りであった。なお、主効果あるいは交互作用が検出された場合、説明変数による基準変数の大小関係の比較では、実験条件は統制群と実験群の間で、preの得点は得点の-1SDと+1SDを基準とした低群と高群の間で行われた。

Table 3の最終ステップの結果は下記の通りである。まず、主効果項の実験条件の主効果が有意(あるいは有意傾向)となった尺度(因子)は、ChUSSIの「功利主義」因子($b=1.96, \beta=.37, p<.05$)、KiSS-18($b=4.64, \beta=.36, p<.05$)、自己評価($b=3.54, \beta=.36, p<.01$)、観察者評価($b=2.18, \beta=.26, p<.10$)であった。いずれの尺度(因子)においても、「実験群」が「統制群」と比べて、得点の増加が有意に大きかった。そして、ChUSSI尺度全体、ChUSSI「功利主義」因子、ACT以外のすべての尺度(因子)においては、主効果項のpreの得点の主効果が有意(あるいは有意傾向)であった。いずれの尺度(因子)においても、トレーニング前の得点の低群(-1SD)が高群(+1SD)と比べて得点の増加が有意に大きかった。

さらに、尺度のpreの得点×実験条件(実験群・統制群)の交互作用項が有意(あるいは有意傾向)となった尺度(因子)は、ChUSSI尺度全体($b=-0.44, \beta=-.39, p<.05$)、ChUSSIの「相手の面子」因子($b=-0.86, \beta=-.45, p<.01$)、「社交性」因子($b=-0.26, \beta=-.28, p<.10$)、KiSS-18($b=-0.48, \beta=-.33,$

$p<.05$)、ACT($b=-0.40, \beta=-.28, p<.10$)、JICSの「自己抑制」因子($b=-0.45, \beta=-.29, p<.10$)、「対人感受性」因子($b=-0.52, \beta=-.36, p<.05$)であった。交互作用が有意(あるいは有意傾向)となったことから、単純傾斜の検定を行った。本来、単純傾斜の検定は「尺度のpreの得点」と「実験条件」の両方から行うべきだが、本研究では、「統制群と実験群ではSSTの効果はどう異なるか」を検証するため、「尺度のpreの得点」の高低のそれぞれにおける実験群と統制群の増加量の差のみを検討することにした。その結果、上記のいずれの尺度(因子)においても、「尺度のpreの得点」の高群(+1SD)における実験条件の単純主効果が確認されなかった。これに対して、「尺度のpreの得点」の低群(-1SD)における実験条件の単純主効果は、上記のいずれの尺度(因子)においても確認された(上記の交互作用のあった尺度(因子)順に、 $b=26.11, \beta=.61, p<.01$; $b=18.44, \beta=.66, p<.01$; $b=6.56, \beta=.43, p<.05$; $b=8.98, \beta=.69, p<.01$; $b=10.08, \beta=.50, p<.05$; $b=3.27, \beta=.55, p<.05$; $b=2.14, \beta=.54, p<.01$)。いずれの尺度(因子)においても、実験群が統制群と比べて得点の増加が大きいことが示された。

考 察

本研究の目的は、文化的SSTプログラムが中国人大学生の社会的スキルに与える向上効果を検証することであった。まず、先行研究から短縮したSSTプログラムを作成した。そして、先行研究における問題点を解消した実験計画法(統制群にもプログラムを設定すること)によりトレーニングを実施した。トレーニングの効果検証は先行研究にならない、自己報告尺度の得点変化(意識レ

ベルの変化)によって検証された。さらに、会話実験と観察実験を設けて、参加者本人、そして観察者からの評価に基づき、参加者の行動的側面の変化に焦点を当てて検証した。

SSTプログラムの意識レベル・行動レベルへの効果の確認

ChUSSIの「功利主義」因子においては、「実験群」が「統制群」と比べて得点の増加量が大きかった。また、ChUSSI尺度全体、ChUSSIの「相手の面子」因子、「社交性」因子、KiSS-18, ACT, JICSの「自己抑制」因子、「対人感受性」因子においては、トレーニング前の社会的スキル得点低群のみ、「実験群」が「統制群」と比べて得点の増加量が大きかった。一方、「統制群」の得点の増加量が「実験群」と比べて大きかった尺度(因子)はなかった。以上のことから、社会的スキルのプログラム(実験群)は社会的スキルとは無関係のプログラム(統制群)と比べて参加者の自己報告、つまり自己意識レベルの社会的スキルを向上させることが明らかとなった。

会話実験では、参加者の会話中の行動に関する自己評価において、実験群の得点の増加量が統制群と比べて有意に大きかった。社会的スキルについては、参加者自身の意識の面だけではなく、具体的な行動の面に関する自己報告でも、SSTの効果が確認できた。さらに、参加者の行動に対する観察実験の観察者からの評価において、「実験群」が「統制群」と比べて得点の増加量が大きかった。参加者本人より客観的な立場から評価できる観察者からも、SSTの効果が確認できたと見えよう。以上のことから、作業仮説1は支持された。

本研究は先行研究(毛・大坊, 2012)の分析方法と異なるものの、SSTの自己意識レベルの結果が再現されたと言えよう。加えて、会話実験に現れた「行動」に対する参加者の自己評価と観察者評価における「実験群」と「統制群」の統計的有意差(有意傾向も含む)は、行動の面からSST参加者のスキルの向上を裏づけた。

社会的スキルの自己評価のみを行う危険性、および他者評価との併用の必要性は、多くの研究(相川, 2009)で強調されてきた。自己評価と他者評価(面接法や自然観察法など)を組み合わせる評価の仕方は、臨床領域において、すでに一般的に行われている(坂野, 1990)。これに対して、社会心理学領域では、参加者自身による意識レベルのみの検討が圧倒的に多く、他者評価を実行した研究(相川, 1999; 相川ほか, 1993; 田中ほか, 2002)は散見する程度で、かつ、他者評価に用いられた評価者の人数は1人か2人のような少数数である。評価者の人数の少なさは評価の偏りを孕む可能性があるため、本研究での観察実験では、多人数の他者評価を用いて、評価の安定性をはかった。以上のことをまとめる

と、本研究の評価者の要因(他者評価の導入)に対する検討は、従来の自己報告においてみられた社会的望ましさや承認欲求などによる報告者が自らもつ評価の歪みを減らし、SST効果の検証精度の向上に貢献できたと考えている。そして、評価対象の要因(行動を評価対象に)に対する工夫は、「SSTの効果を多角的に検討する」という方法論の精緻化に寄与したと言えよう。

社会的スキルの不足によって、孤独感、抑うつなどの症状が引き起こされる可能性(相川, 2009)があり、また、若者のコミュニケーション力の低下が叫ばれている昨今においては、いかに若者の社会的スキルを向上させるかが喫緊の課題となっている。本研究は、SSTによる社会的スキルの向上の可能性を改めて裏づけ、この結果は積極的に応用できよう。

プログラムの文化的要素の効果とその活用の可能性

本研究では、実験群は統制群と比べて、社会的スキル得点が向上した。その向上は中国文化(ChUSSI尺度全体、ChUSSIの「相手の面子」因子、「社交性」因子、「功利主義」因子)、文化共通(KiSS-18, ACT)、そして日本文化(JICSの「自己抑制」因子、「対人感受性」因子)の社会的スキル因子にわたって現れた。これらの結果から、作業仮説2の「実験群の通文化的な社会的スキルと中国文化を反映する社会的スキルの得点は向上する」という部分は支持されたが、「日本文化を反映する社会的スキルのレベルは変化しない」という部分は支持されなかった。作業仮説2は部分的に検証された。

etic-emicアプローチの考えに基づけば、文化共通の社会的スキルも、文化独自の社会的スキルも存在する。また、大坊(2006)の「社会的スキルの階層構造」に基づけば、基礎スキルがすべてのスキルの根底にあり、文化スキルが基礎スキルの上に位置づけられ、文化スキルは基礎スキルとのリンクがあるはずである。この考え方を延長して、基礎スキルを媒介して、文化スキル同士が関連する可能性が考えられる。本研究では、中国と日本には、それぞれ独自のスキルがあると仮定した上で、中国文化と文化共通のスキルをSSTの対象とし、尺度での測定を通して、SSTの効果を検討した。その結果、「日本文化のスキルに変化がない」という作業仮説に反して、日本文化のスキルの一部が、中国文化のスキルや基礎的なスキルと同じように向上した。これらのことを合わせて考えると、本研究のSSTは、中国的スキルの向上が、基礎的なスキルの媒介で、日本的スキルの向上につながった可能性、あるいは基礎スキルの向上によって文化スキルの向上につながった可能性があり得る。例えば、中国文化における「相手の面子」の内容は、相手をたてることによって表現される。このプロセスは、自分を抑えることにつながり、結果的に日本文化の「自己抑制」につながった可能性がある。また、文化共通のスキ

ルである「非言語的コミュニケーション」の向上は、日本文化の言葉によらない感覚的メッセージの操作に関する「対人感受性」の能力の向上につながった可能性がある。ただし、中国文化スキル向上は基礎スキルのどの部分を媒介して、日本文化スキルの向上につながったかについて、本研究では厳密に分化することが難しく、今後検討する必要がある。さらに、このような文化スキルの間の関連を集団主義・個人主義のアプローチ (Triandis, 1995 神山・藤原編訳 2002) から考えると、中国と日本は同じ集団主義文化に位置づけられるためスキルの関連がみられたのか、それとも中国とアメリカのように、集団主義と個人主義的な文化の間にもスキルの関連がみられるのか、について今後検討する必要がある。

本研究の結果を踏まえ、文化特有のスキルがあるにせよ、文化間のスキルの相互的な関連性は考えられる。そのため、今後の研究では、文化のスキルを完全に他の文化と独立して考えるのではなく、文化スキル間の関連性を含めて検討すべきだと考えられる。

作業仮説2の「日本文化のスキルに変化がない」ことは検証できなかった一方、少なくとも「実験群の通文化的な社会的スキルと中国文化を反映する社会的スキルの得点は向上する」ことが検証できた。この結果は、本研究のプログラムの今後の活用を示唆する。例えば、本研究のプログラムを、中国文化に適応しようとする外国人に適用すれば、少なくとも彼らの中国文化への適応を促進することにつながる可能性が考えられる。

短縮プログラムの効果と応用可能性

本研究では、トレーニングの期間の長短によるトレーニング効果を比較するために、先行研究(毛・大坊, 2012)のプログラムを、トレーニングの期間を3週間から8日間に短縮した。合計3週間の毛・大坊(2012)の研究では、実験群は中国文化に関連する尺度(ChUSSI)の4つの因子および通文化的尺度(KISS-18, ACT)など、合計7つの尺度(因子)において、得点の有意な上昇がみられた。また、得点の上昇がみられた多くの尺度には、トレーニング前の得点水準に左右されず、高群と低群のいずれにも得点の向上がみられた。本研究では、中国文化に関連する尺度および通文化的尺度の7つのうち、中国文化スキルであるChUSSIの「友達への奉仕」因子には、実験群と統制群の得点の変化に有意な差はなかった。また、交互作用項が有意となった尺度(因子)は、トレーニング前の得点低群における実験群の得点が有意に向上したが、得点高群に実験群と統制群の間に有意差がなかった。先行研究(毛・大坊, 2012)の中長期のプログラムと比べて、得点が向上した社会的スキル尺度(因子)の数や向上できた規模が限定的である。とりわけ、もともと社会的スキルの高い人に対して、本研究の短期間のSSTでは、効果が期待

できないことが明らかとなった。これらの結果は、先行研究(栗林・中野, 2007; 津村, 2002)で示された結論、つまり、トレーニング期間が短いと、SSTの効果が弱いということと一致している。「友達への奉仕」因子で実験群が統制群と比べて得点が有意に向上しなかった原因としては、この因子の項目の内容にあると考えられる。「友達への奉仕」因子には、「友達と一体感をもって付き合う」など、ある程度時間をかけないと実行できない行動が含まれている。本研究の2回の質問紙測定タイミングがトレーニング前後の一週間であるため、短期間ではこのようなスキルが身につけられなかったのではないかと推測される。

しかし、上記の結果を裏返して考えれば、個別因子以外、本研究の短縮プログラムは意識レベルの低得点者には、多くの尺度に得点の向上をもたらした。このことを行動レベルの得点向上という結果とあわせると、本研究の短縮プログラムでも、参加者の意識および行動の向上に効果があると言えよう。この結果から、低コストで手軽に実施できるというメリットを特徴とする本研究の短縮プログラムは、中長期プログラムのコストの問題を解決するためにも、今後のSST現場において、とりわけ社会的スキルの不足している者(SST前の各尺度の高得点者に効果がなかったことを受けて)に活用できると考えられる。人間関係がうまくいかず、社会的スキルが低下していると言われている(毛, 2007; Peng & Dong, 2010; 周, 2006)中国の若者にとって、このようなプログラムの普及が、彼らの社会への適応に大いに寄与することが期待できよう。

本研究の限界と今後の課題点

本研究では、社会心理学領域で開発された「行動の型」を偏重するSSTプログラムに文化的要素(mianzi, renqing, guanxi)を導入し、中国社会において、他者から適切な反応を引き出す行動ができるような「環境に機能する」文化SSTプログラムを実行した。しかし、参加者のSST前後の会話行動に対する検証である自己評価/観察者評価リストにおいては、「行動の型」に基づく評価からの脱却ができていない。その結果、参加者のSSTを通して身につけた文化的行動の表出は、中国文化的文脈において、相手との良好な相互作用が生じたかどうかの機能面のチェックが不十分だと言わざるを得ない。今後、機能面の評価を、とりわけ客観性を保てる他者評価から上記の不足を補う必要がある。例えば、先行研究(佐藤・佐藤・高山, 1988)に挙げられたソシオメトリー法などの評価の仕方を文化的文脈と絡め、活用することが考えられる。

本研究は、行動面におけるSSTの効果を検証するために、初対面の人との会話実験を導入した。しかし、設定された会話のテーマは一般的な話題で、会話時間はわず

か5分間であった。時間の短さ、そしてテーマの指向性のなさにより、本研究でねらいとしていた友達への奉仕や功利的なネットワーク形成を図る行動について、機会を得ず、出現しづらく、あるいは社会的場面に馴染まない行動として抑制された可能性も考えられる。ねらいとしたスキルを厳密に検証するために、今後、田中(2007)にならい、参加者がある特定スキルを発揮できるロールプレイを設定して検証しなければならない。加えて、検証項目について、スキルのマイクロ・マクロの両方の視点からすべきだと考えられる。

本研究のSSTは、先行研究との比較の意味も込めて、短期集中的な方法を採用したので、セッション間に間を置けなかった。それでも、多くの尺度に得点の向上がみられた。しかし、学習理論における「集中学習」と「分散学習」の考え方(森正, 1993)を踏まえると、本研究のような短期集中的なやり方には、学習結果の不安定さが秘められている可能性がある。今後、トレーニング後の追跡データを分析し、SST結果の持続性を確かめる必要がある。また、SSTで身につけたスキルを日常生活場面で用いることができ初めて有効性を発揮すると考えられる。よって、追跡調査では、自己報告の自由記述による振り返りという形で、SST終了後におけるスキルの生活場面での応用状況を明らかにする必要がある(追跡調査はすでに完了したので、そのデータを用いて今後の研究で検討する)。

本研究は、先行研究(毛・大坊, 2012)に続いて、中国人大学生をサンプルにSSTを実施して、社会的スキルの文化的特徴を検討した。しかし、プログラムに組み込まれた文化的要因が参加者にどのような影響を与えるかを検討するには、中国人サンプルのみの検討では不十分であると言わざるをえない。作業仮説2に対する考察で述べた文化スキル間の関連を解明するための一環として、本研究のプログラムを用いて、同じ集団主義文化にいる日本人、そして個人主義文化の出身者であるアメリカ人を対象にSSTを行い、プログラムの文化特有の部分はどのような効果があるかを検討する必要があると考えられる。

問題部分で言及したように、臨床心理学領域のSST、つまり、個人の適応性をどのように上げていくか、個人対象的な実践は重要である。しかし、一般の人を対象に仮説検証を行った本研究の見聞からは、それに応えきれないのが現状である。実践研究に今回の研究がいかように役に立つか、つまり、今回の仮説検証研究と実践研究の2種類の研究の架け橋を今後考えることが重要であろう。

引用文献

Adams, G. R., Openshaw, D. K., Bennion, L.,

Mills, T., & Noble, S. (1988). Loneliness in late adolescence: A social skills training study. *Journal of Adolescent Research*, **3**, 81-96.

相川 充 (1999). 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, **14**, 95-105.

相川 充 (2009). 新版 人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学—サイエンス社

相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 (1993). 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究—孤独感と社会的スキルとの関係—社会心理学研究, **8**, 44-55.

Argyle, M. (1967). *The psychology of interpersonal behavior*. London: Penguin Books.

Bernieri, J. F., Gillis, J. S., Davis, J. M., & Grahe, J. E. (1996). Dyad rapport and the accuracy of its judgment across situations: A lens model analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 110-129.

Berry, J. W. (1989). Imposed etics—emics-derived etics: The operationalization of a compelling idea. *International Journal of Psychology*, **24**, 721-735.

大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定—ACT尺度の構成—北星学園大学文学部北星論集, **28**, 1-12.

大坊郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築—対人社会心理学研究, **3**, 1-8.

大坊郁夫 (2006). 社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き 電子情報通信学会技術研究報告, **106**, 31-36.

大坊郁夫・栗林克匡・中野 星 (2000). 社会的スキル実習の試み 北海道心理学研究, **23**, 22.

Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 333-351.

Furnham, A. & Bochner, S. (1986). *Culture shock*. London: Methuen & Co. Ltd.

Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. (1980). *Skill streaming the adolescent: A structured learning approach to teaching prosocial skills*. Champaign: Research Press.

後藤 学・大坊郁夫 (2005). 短期間における社会的スキル・トレーニングの実践的研究 対人社会心理学研究, **5**, 93-99.

後藤 学・大坊郁夫 (2009). 短期的な社会的スキル・トレーニングの実践—社会人への適用を目指して— 応用心理学研究, **34**, 193-200.

- Gresham, F. M. (2001). Assessment of social skills in children and adolescents. In J. W. Andrews, D. H. Saklofske, & H. L. Janzen (Eds.), *Handbook of psychoeducational assessment*. NY: Academic Press. pp. 325-355.
- Hwang, K. K. (2006). Constructive realism and Confucian relationism: An epistemological strategy for the development of indigenous psychology. In U. Kim, K. S. Yang, & K. K. Hwang (Eds.), *Indigenous and cultural psychology: Understanding people in context*. New York: Springer. pp. 73-108.
- 上出寛子・大坊郁夫・村澤博人・趙 鏞珍・毛新華・高橋直樹 (2007). 顔形態特徴の日中韓比較 (2)―社会的スキルとの関連から― 電子情報通信学会技術研究報告, **107**, 19-24.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 木村昌紀・大坊郁夫・余語真夫 (2010). 社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの検討 社会心理学研究, **26**, 13-24.
- 児玉光雄 (2005a). IQが高くなる1日10問右脳ドリル 東邦出版株式会社
- 児玉光雄 (2005b). IQが高くなる続 右脳ドリル 東邦出版株式会社
- 栗林克匡・中野 星 (2007). 大学生における社会的スキル・トレーニングの成果と評価 北星学園大学社会福祉学部北星論集, **44**, 15-26.
- 毛 新華 (2007). KiSS-18の中国人への適用に関する検討 菊池章夫 (編) 社会的スキルを測る: KiSS-18ハンドブック 川島書店 pp. 107-122.
- Mao, X. & Daibo, I. (2006). The development of Chinese university-students social skill inventory. *Chinese Mental Health Journal*, **20**, 679-683, in Chinese.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2007). KiSS-18の中国人大学生への適用 対人社会心理学研究, **7**, 55-59.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2012). 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討 パーソナリティ研究, **21**, 23-39.
- 森正義彦 (1993). 学習指導法の心理学 有斐閣
- 中村和彦 (2013). 大学1年春学期におけるラボラトリー方式の体験学習の効果―体験から学ぶ力の影響― 実験社会心理学研究, **52**, 137-151.
- 大月 友・青山恵加・伊波みな美・清水亜子・中野千尋・宮村忠伸・杉山雅彦 (2006). アスペルガー障害をもつ不登校中学生に対する社会的スキル訓練―社会的相互作用の改善を目指した介入の実践― 行動療法研究, **32**, 131-142.
- Peng, R. & Dong, G. (2010). The value obstruction of social skills and internet addiction of college students. *Journal of Educational Science of Hunan Normal University*, **9**, 124-126, in Chinese.
- 坂野雄二 (1990). Social Skills Trainingの発展と今後の課題 集団精神療法, **6**, 97-102.
- 佐藤正二・佐藤容子・相川 充・高山 巖 (1993). 攻撃的な幼児の社会的スキル訓練―コーチング法の適用による訓練効果の維持― 行動療法研究, **19**, 98-109.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 (1988). 拒否される子どもの社会的スキル 行動療法研究, **13**, 26-33.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 (1993). 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練―社会的孤立行動の修正― 行動療法研究, **19**, 1-12.
- 園田茂人 (2001). 中国人の心理と行動 日本放送出版協会
- Takai, J. & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 224-236.
- 田中健吾・相川 充・小杉正太郎 (2002). ソーシャルスキルが2者間会話場面のストレス反応に与える効果に関する実験的検討―2者間のソーシャルスキルにおける相対的差異の影響― 社会心理学研究, **17**, 141-149.
- 田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 田中共子 (2007). 異文化適応方略としてのソーシャルスキル学習 藤原武弘 (編著) 人間関係のゲーミング・シミュレーション: 共生への道を模索する 北大路書房 pp. 179-200.
- Tanaka, T. (2012). A cross-cultural psycho-educational program for cross-cultural social skills learning to international students in Japan: Focusing on the AUC-GS learning model. *Japanese Journal of Applied Psychology*, **38**, 77-82.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism & collectivism*. Boulder, CO: Westview Press. (神山貴弥・藤原武弘 (編訳) (2002). 個人主義と集団主義: 2つのレンズを通して読み解く文化 北大路書房)
- 津村俊充 (2002). ラボラトリー・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果―社会的スキル測定尺度KiSS-18を手がかりとして― アカデミア (人文・社会科学編), **74**, 291-320.
- 津村俊充・星野欣生 (1996). Creative human relations (I~VIII) プレスタイム

渡辺弥生 (1996). ソーシャル・スキル・トレーニング 日本文化科学社
周 潔 (2006). 変わりつつある中国の家族関

係 人民中国 2006年2月 <<http://www.peoples-china.com/maindoc/html/fangtan/200602.htm>> (2014年10月1日)

Appendix 1 自己報告と行動評価尺度の pre, post および gap の実験群／統制群別基礎統計量

変数名	測定	実験群 (N=20)		統制群 (N=19)		
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
ChUSSI	ChUSSI全体 (ChUSSI)	pre	243.45	35.51	239.47	41.59
		post	262.80	31.83	249.95	48.01
		gap	19.35	25.20	10.47	16.36
	相手の面子 (PM)	pre	126.70	14.18	120.21	15.95
		post	134.15	14.17	124.32	20.61
		gap	7.45	17.25	4.11	10.39
	社交性 (SA)	pre	60.15	16.24	63.05	17.83
		post	67.55	13.31	67.74	18.01
		gap	7.40	8.76	4.68	6.26
	友達への奉仕 (AB)	pre	36.15	6.19	35.47	6.61
		post	37.00	6.23	35.47	6.18
		gap	0.85	3.96	0.00	2.43
	功利主義 (CO)	pre	20.45	6.42	20.74	6.09
		post	24.10	6.94	22.42	6.25
		gap	3.65	2.87	1.68	2.03
KiSS-18	pre	62.90	9.03	61.37	9.38	
	post	68.20	7.49	62.47	9.74	
	gap	5.30	7.85	1.11	4.15	
ACT	pre	65.95	14.43	70.42	13.90	
	post	71.60	14.58	71.00	15.60	
	gap	5.65	12.54	0.58	6.00	
JICS	察し能力 (PA)	pre	21.00	3.58	22.21	3.14
		post	22.50	2.91	22.26	3.40
		gap	1.50	3.35	0.05	2.48
	自己抑制 (SR)	pre	22.75	4.79	22.74	4.03
		post	24.63	3.68	23.00	4.20
		gap	1.21	3.78	0.26	1.97
	上下関係の調整 (HRM)	pre	11.80	2.35	11.84	1.61
		post	12.40	1.98	11.79	1.84
		gap	0.60	1.64	-0.05	1.31
	対人感受性 (IS)	pre	10.40	3.41	10.11	2.11
		post	11.15	2.21	10.26	2.40
		gap	0.75	2.51	0.16	1.30
行動評価	自己評価 (SELF)	pre	37.30	5.50	39.58	4.35
		post	43.10	4.73	40.84	4.51
		gap	5.80	5.36	1.26	3.45
	観察者評価 (OBSERVER)	pre	28.40	3.51	30.56	5.19
		post	33.32	3.61	32.22	4.47
		gap	4.92	3.93	1.66	3.86

ChUSSI全体の得点範囲 41~369点

PM, SA, AB, COのそれぞれの得点範囲 19~171点、12~108点、6~54点、4~36点

KiSS-18, ACTのそれぞれの得点範囲 18~90点、13~117点

PA, SR, HRM, ISのそれぞれの得点範囲 6~30点、7~35点、3~15点、3~15点

SELF, OBSERVERの得点範囲 ともに10~100点

Appendix 2 階層的重回帰分析に使用するすべての変数の相関行列

変数名 ^{注1,2}	相関係数																										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	
1 gun	0.51 (0.51)																										
2 CHUSSIppe	0.05	244.51 (38.13)																									
3 CHUSSIfgap	0.21	-0.17	15.03 (21.55)																								
4 PMpre	0.22	0.87**	-0.20	123.54 (15.23)																							
5 PMgap	0.12	-0.13	0.94**	-0.25	5.82 (14.24)																						
6 SAppe	-0.09	0.91**	-0.18	0.66**	-0.08	61.56 (16.87)																					
7 SAgap	0.08	0.77*	0.79**	-0.15	0.60**	-0.39*																					
8 ABppe	0.05	0.71**	-0.04	0.60**	0.02	0.50**	-0.02																				
9 ABgap	0.44	0.32	0.29	0.13	0.04	0.17	0.07	0.09	-0.04	-0.31*																	
10 COpre	0.20	0.59	-0.02	0.79**	-0.04	0.51**	-0.04	0.77**	-0.23	0.53**	0.14																
11 COgap	0.26	0.69	0.37*	0.04	0.56**	0.11	0.48**	-0.03	0.37*	-0.03	-0.10	-0.06															
12 KISSppe	0.62	0.15	0.09	0.74**	0.00	0.60**	0.04	0.72**	-0.12	0.56**	-0.08	0.55**	0.23														
13 KISSgap	0.32	0.26	0.17	0.62**	-0.09	0.51**	-0.21	0.63**	-0.12	0.33*	-0.10	0.33*	-0.38*														
14 ACTppe	0.68	0.13	-0.16	0.44**	0.08	0.19	0.17	0.51**	-0.07	0.39*	-0.05	0.44**	0.02	0.45**	-0.03												
15 ACTgap	0.31	0.25	0.05	-0.17	0.13	-0.27*	0.03	-0.07	-0.18	0.35*	0.14	-0.19	-0.05	0.05	-0.28*												
16 PAppe	0.21	0.59	-0.18	0.35*	0.03	0.33*	0.07	0.36*	-0.10	0.09	-0.02	0.27*	0.23	0.42**	-0.18	0.27*	0.07										
17 PAgap	0.80	0.30	0.40*	-0.25	0.29*	-0.30*	0.49**	-0.12	0.05	-0.29*	0.24	-0.02	0.35*	0.07	-0.30*	-0.53**											
18 SAppe	0.22	0.74	0.01	0.42**	-0.08	0.49**	-0.09	0.35*	-0.11	0.10	0.16	0.32*	-0.02	0.14	0.04	0.30*	0.48**	-0.56**									
19 SAgap	0.74	0.30	0.16	-0.03	0.24	-0.13	0.24	0.03	0.09	-0.07	0.15	0.11	0.20	0.01	0.37*	0.19	-0.17	-0.03	0.32*	-0.36*							
20 HRMppe	0.18	0.82	-0.01	0.51**	0.06	0.41**	0.04	0.50**	-0.10	0.26	0.20	0.52**	0.25	0.54**	-0.08	0.23	-0.01	0.43**	-0.08	0.04	0.47**						
21 HRMgap	0.28	0.50	0.22	-0.31*	0.14	-0.20	0.13	-0.37*	0.29*	-0.18	-0.40*	-0.24	0.12	-0.38*	0.39*	-0.20	0.15	-0.20	0.04	0.07	-0.08	-0.43**					
22 ISppe	0.26	0.05	0.54**	0.10	0.42**	-0.14	0.53**	-0.01	0.33*	-0.17	0.49**	0.29*	0.62**	-0.08	0.46**	-0.21	0.40*	-0.05	0.12	-0.09	0.28*	-0.10					
23 ISgap	0.46	0.20	0.15	-0.21	0.26	-0.10	0.18	-0.29*	0.23	-0.05	0.30*	-0.19	0.10	-0.24	0.28*	-0.03	0.23	-0.20	0.22	-0.06	0.12	-0.15	-0.03	-0.58**			
24 SELFppe	0.84	-0.23	0.38*	0.09	0.29*	-0.10	0.39*	-0.05	0.23	0.01	0.31*	0.31*	0.42**	0.01	0.39*	-0.32*	0.36*	0.18	-0.06	0.12	0.45**	-0.37*	0.48**	-0.10			
25 SELFgap	0.35	0.59	0.04	0.06	0.04	0.11	0.12	-0.16	0.06	0.01	0.11	0.08	0.14	0.24	0.09	-0.14	0.20	-0.04	-0.11	0.35*	0.00	-0.03	-0.56**				
26 OBSERVEppe	0.29	0.45	0.10	0.16	0.19	0.00	0.33*	0.00	0.21	-0.04	0.13	0.00	0.35*	0.07	0.34*	-0.30*	0.34*	0.04	0.24	-0.09	-0.15	0.26	0.19	-0.08			
27 OBSERVEgap	0.33	0.41	0.09	0.09	-0.10	0.03	0.12	-0.06	-0.06	-0.12	0.34*	0.18	-0.06	-0.28*	0.12	-0.13	0.19	-0.35*	0.03	0.15	-0.01	0.12	-0.14	-0.12	-0.17	-0.57**	

注1 gun=気銃罪/窃盗罪、CHUSSI=全休、PM=相手の面子、SA=社交性、AB=友達への存在、CO=功利主義、KISS=KISS-18、PA=察し能力、SR=自己抑制、HRM=上下関係の調整、IS=対人感受性、SELF=自己評価、OBSERVER=観察者評価。
 注2 因子名の英文略+preは該当尺度(因子)のトレーニング前の時点項を示し、英文略+gapは該当尺度(因子)のトレーニング前後(後-前)の時点差項を示す。
 注3 * $p < .05$, ** $p < .01$